

最終戦争論 2

石原莞爾は語る

現時の国策即ち昭和維新の中核問題である東亜連盟の結成には、根本に於いて東亜諸民族特に我が皇道即ち王道、東方道義に立ち帰る事が最大の問題である。国家主義の時代から国家連合の時代を迎えた今日、民族問題は世界の大問題であり、日本民族も明治以来朝鮮、台湾、満州国に於いて他民族との協同に於いて殆ど例外なく失敗して来た事を深く考え、皇道に基づき正しき道義観を確立せねばならぬ。満州建国の民族協和はこの問題の解決点を示したのである。

満州国内における民族協和運動は今日まで遺憾ながらまだ成功してはいない。明治以来の日本人の惰性の然らしむるところ、1度は陥るべきものであろう。しかし一面建国の精神は一部人士により堅持せられ、かつ実践せられつつあるが故に、一度最大方針が国民に理解せられたならばたちまち数十年の弊風を一掃して、東亜諸民族と心からなる協同の大道に邁進するに至るべきを信ずる。

この新時代の道義観の下に、世界最終戦争を目標とする東亜大道の諸政策が立案実行せられる。しかしそれがためには我が東亜の地域に加わるべき欧米覇道主義者の暴力を排除し得る事が絶対条件である。即ち東亜（我が）国防全からずして、東亜連盟の結成は1つの夢にすぎない。

東亜連盟の結成が我が国防の目的であり、同時に諸政策は最も困難なる国防を全からしむる点に集中せらるる事とならねばならぬ。国策と国防はかくて全く一体となるのである。いわゆる国防国家とはこの意味に外ならない。

東亜連盟の結成を妨げる外力は、

- 1、ソ連の陸上武力。
- 2、米の海軍力、これには英、ソの海軍が共同すると考えねばならぬ。

であるからそれに対し、

- 1、ソ連が極東に使用し得る兵力に相当するものを備え、かつ少なくともソ連のバイカル以東に位置するものと同等の兵力を満州、朝鮮に位置せしむ。
- 2、西太平洋に出現し得べき米、英、ソの海軍力に対し、少なくとも同等の海軍力を保持せねばならぬ。